

# 静岡・瀬名川遺跡

- 1 所在地 静岡市瀬名川
- 2 調査期間 一九九七年(平9)六月～一九九八年五月
- 3 発掘機関 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 4 調査担当者 中川律子・勝又直人ほか
- 5 遺跡の種類 集落跡・水田跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代中期～後期、中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

瀬名川遺跡は静岡平野の北東部、沖積微高地上に立地している。



(静岡・清水)

瀬名川遺跡の北〇・五kmのところには、国道一号線バイパス工事に伴って調査が行なわれ木簡が出土した瀬名遺跡が所在する(本誌第一、一三号)。また、南は鎌倉時代から室町時代にかけての東海道に接し、当時この瀬名川に宿駅が置かれていたといわれている。

今回の発掘調査は県道中

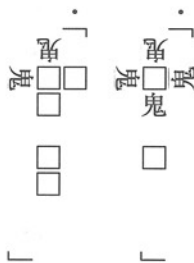
吉田瀬名線の工事に伴うものである。調査の結果、調査区の南側では鎌倉時代から室町時代の集落域の一部を確認した。遺構は東側の杭列で区画された範囲に集中し、二間×三間の総柱の掘立柱建物をはじめとする柱穴群や溝、井戸状遺構などを検出した。

遺構周辺で出土した遺物には、青磁器片や陶磁器、古銭、硯石、曲物や柄杓、漆碗、糸巻具、横櫛などがある。

今回報告する呪符木簡は、集落域の北端で検出した井戸状遺構から出土した。この井戸状遺構は、直径一・七mの円形の遺構で、深さは一・〇mを測る。同じ遺構からは、碗・小皿など六点の山茶碗や漆碗、曲物、横櫛、箸状木製品が出土している。

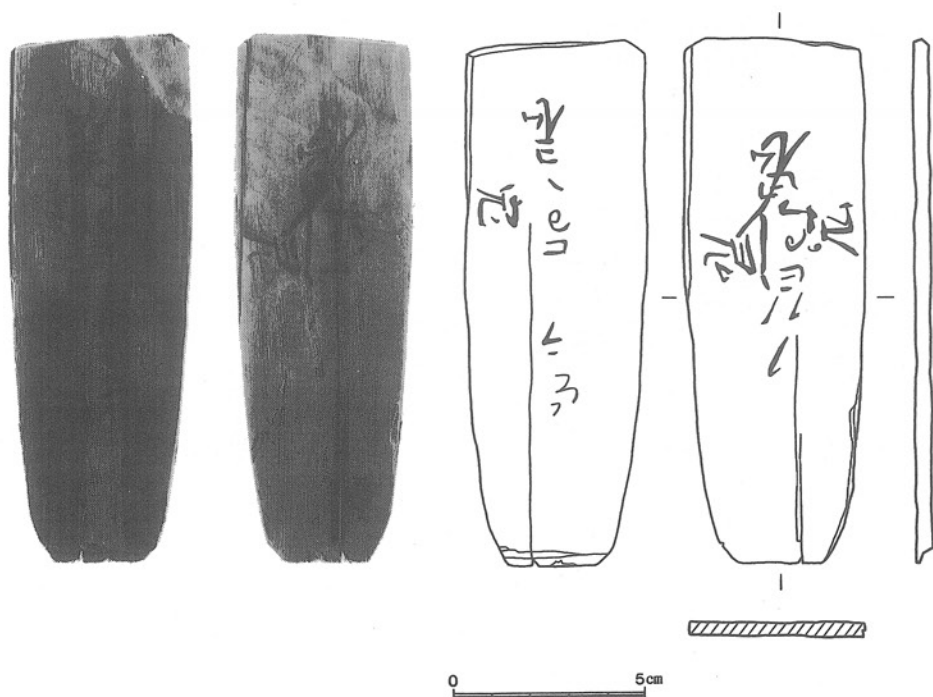
## 8 木簡の釈文・内容

(1)



139×47×4 011

木簡は薄い板状の完形品で、下方に向かってやや幅が狭くなる形状を呈する。両面に成形時の削り痕が残っている。墨痕はところどころ薄くなっているが、肉眼でも観察できる。表裏両面に符籙が読みとれる。表面は中央の墨痕を中心に、「鬼」が四文字いずれも中



央を天にして異なる方向で書かれ、そのすぐ下にも墨痕がある。裏面の符籙もほぼ同じスタイルで文字が配されていたと思われるが、「鬼」の下に二文字観察できる。

9 関係文献

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所『年報XIV』(一九九八年)

(中川律子)